古墳から見た　ヤマト王権の形成

会員番号　10117
柴田 克彦

Ⅰ.邪馬台国

1.1.邪馬台国の特定

『魏志倭人伝』の行程に基づき邪馬台国の地を検証し推理してみよう。
まず前提として当時の中国での日本地図は９０度右に回転していることである。倭国に上陸した末蘆国からこの地図となっている。従って「南」は「東」と読み替える必要がある。
ここに記された行程は、実際には邪馬台国まで行っておらず伝聞を記したものと思われる。恐らく伊都国の先には訪問していないと推測され、遠方の国々まで支配権が及んでいたと誇張するために距離を極端に長くしたものと感じている。これは『魏志倭人伝』全体を通して言える事であるが、情報が少ないのは伝聞であり、それも伊都国からもたらされたものであり、九州の状勢に限られたものと感じている。
そして『魏志倭人伝』を検証すると、
《東行して不弥国に（ふみこく・ふやこく）まで百里で至る。》
奴国の春日市から南でなく東は正に宗像であるので、古来より繁栄していた宗像が不弥国と確定される。
《南へ投馬国に至る、水行二十日》宗像から海里投馬国へ。
宗像から投馬国へは東への航海であり、東にあるのが出雲であり、投馬国である出雲までの長い航海である。
瀬戸内海は未だ啓開された航路でなく、航海できるのは日本海である。
当時出雲大社でなく杵築大社と呼ばれ、２世紀には島に立派な社殿が建っていた。なお出雲は当時大社だけでなく、交易が盛んな港湾都市であった。
《南へ邪馬台国（邪馬壹国）に至る。水行十日・陸行一月》
出雲から水行10日は、宗像と出雲間の半分の距離であるから鳥取辺りとなる。
出雲から宍道湖そして中海を経て境水道につながっていた。美保から青谷まで（または長瀬高浜）の航海である。青谷から中国山地を超えて吉備に至る。実質的な倭王である吉備を素通りすることは許されない。
そして吉備からのルートは整備された道を歩み難波へ、大和川を遡上して最終目的地である大和の邪馬台国（纒向から変身した）に至るものと本稿では考えている。
そして３世紀中頃の主要国は、伊都国、奴国、不弥国（宗像と想定）投馬国（出雲を想定）吉備、ヤマトが想定され、それらを通ったルートが想定される。しかし実際魏の使節がこの行程通り通って邪馬台国へ行ったかは疑問に感じている。

1.2.纒向遺跡

纒向遺跡について『魏志倭人伝』では何も語られず、倭国大乱を卑弥呼が共立されて鎮まり、邪馬台国を建国されたとなっている。現実とはかけ離れた記述となっていると感じている。

この遺跡が突然生まれたのでなく、戦に明け暮れる生活から解放されて、平和な世界を夢見て、環濠もない理想的な都市を作ろうとする機運が高まり、倭国大乱も納まり、戦いに疲れた諸国が平和な争いの無い生活を渇望した願いから、関係国が談合を行い合議で生まれた国であろう。
その力ある勢力とは、北部九州、吉備、瀬戸内、畿内の各勢力であり、その中心が吉備で楯築遺跡を見れば明らかであろう。また３世紀頃には吉備から畿内への瀬戸内海は十分通れる海路であり、畿内への物流を掌握できた。しかし早くから先進文化に接していた北部九州は、纒向には参加せず、従って纒向に鉄が少ない。邪馬台国の時代となって、一大率が設置され政権に参加することになる。
纒向が誕生した後に、吉備が中心となって北部九州も招いて、230年頃に統一国家を創るべくそのトップに卑弥呼を選出して邪馬台国を造ったのであろう。吉備に担がれたのが卑弥呼であり、纒向を建国した国々と北部九州

が邪馬台国を建国したと考える事が最も合理的であろう。
そこで本稿では、纒向と邪馬台国の時代が重なっていることからも、纒向遺跡の延長線上に邪馬台国が存在したものと考えている。そして纒向が発展的解消をしたのが邪馬台国と考えている。

纒向の地から２世紀の鏡などの遺物は一切発掘されてなく、全くの空地であったことが類推でき、纒向は弥生人でなく古墳人の遺跡であろう。この地に、180年頃から大和人が住み始め、直径1ｋｍの範囲に水路建設などの都市建設が始まっている。この計画を推進したのが吉備勢力であろう。そして210年頃から建物の造成が行われ始めた。その後東西2ｋｍ南北1.5ｋｍに拡大され、東海始め各地で生産された土器などが出土して土器全体の15%が搬入土器である。北部九州の土器は少なく、鉄器も少なく、農耕具が出土しない都市遺跡である。

３世紀前半の国内最大級の大型建物跡が見つかり、柱穴が四角であり、周囲の建物跡と方位や中心軸が同一線上に検出されたことから、遺構内の建築物が計画的に建てられていることが分かった。【図1纒向遺跡の大型建物】参照。本稿では233年が邪馬台国が建国された時期と考えているので、この建物群が邪馬台国卑弥呼の宮殿跡であったと推測する。つまり卑弥呼が邪馬台国の女王となったのも２３３年と本稿では考えている。そして4世紀始め頃の320年に消滅している。後に述べるが崇神天皇の時代である。

図１　纒向遺跡の大型建物

纒向地区の墳丘墓は、「纒向型前方後円墳」と呼ばれることがあり、帆立貝のような形状をしていることから帆立貝型墳丘墓である。その始めが225年頃築造された周濠を持つ全長94mの纒向石塚古墳である。埋葬施設は残っていないが、周濠内から多くの葬送儀礼用具が出土している。また墳丘裾には1.8mの白木の柱が立てられ、柱上を飾ったであろう弧文円板なども出土している。
この纒向型前方後円墳の特徴は、後円部に比べ前方部が著しく小さく低平である。また墳丘全長・後円部直径・前方部の長さの比が3：2.：1を原則としている。更に後円部が扁球であり正円形でないことである。
引き続き古墳の造営が進み、全長93mの矢塚墳丘墓は240年頃築造で、周辺から庄内Ⅱ式の土器が出土している。勝山墳丘墓は250年頃築造で、全長115mで布留０式土器が出土している。葺石を伴う。更に周濠くびれ部から朱塗りの板材や柱材などの建築材料があり、恐らく埋葬施設を覆う建物の部材であろう。
そして上述の石塚古墳・矢塚古墳と勝山古墳を結ぶとほぼ正三角形の配置となるが、その意味は不明であるが、三兄弟であるかも知れない。東田大塚墳丘墓は280年頃築造で、全長110mで布留0式土器と甕棺が出土、葺石を伴う。メクリ１号墳は280年頃築造で、全長28mの前方後方墳である。東海人が多く労働に従事してい

たが、その首領の墓と想定され、現在残っていない。
ここで注目すべきはホケノ山古墳であるが、全長80mで築造時期に関して諸説あるが本稿では250年頃と考えている。（卑弥呼の項で説明）これ等の纒向古墳群をどう解釈すればよいのであろうか。
一つは邪馬台国建国の功労者から順次邪馬台国の運営の功労者たちの墓か。他に大和国或は纒向国の首長の墓か。何であろうかよく分からない。

Ⅱ.古墳時代

前方後円墳の箸墓の築造を以て古墳時代と成る。
古墳の築造年は古墳形式や副葬品や土器等からの想定である。
天皇制は天武天皇が初代と心得るが、大王や天皇が混在しているので、便宜上天皇とさせて戴く。

1.前方後円墳の誕生

前方後円墳の誕生は、決め手に欠けるが考えられる事柄が、
1）纒向型墳丘墓から生まれた。帆立貝型の円形部を正円とし方形部を結んだ。
2）楯築遺跡の双方中円墳には主たる方形部と従たる方形部があり、従たる方形部の使用価値が乏しく双方部の片方を失くすことから派生した。
3）円墳に祭祀を行う方形部が結合した。
などが考えられている。

箸墓の前方後円墳が生まれた経過は、本稿では次の通りと考えている。
先ず阿波で石囲い木槨で円丘に突出部のついた萩原２号墳が220年頃生まれ、このほぼ30年後に同形のホケノ山古墳が卑弥呼より先に亡くなった弟の為に卑弥呼が造営し、卑弥呼が箸墓の設計を行って前方後円墳が完成したものと現状考えている。卑弥呼は鬼道上に叶った相応しい型が前方l後円墳であると導き出したものとも推定する。前方後円墳の特殊器台や埴輪は吉備に、葺石や石室の構造は瀬戸内に、銅鏡を多数副葬する習俗は北部九州に、それぞれ起原があり、これらを採り入れることが邪馬台国に相応しいと考えて生み出されたものであり、卑弥呼の王権の基盤も地域連合にあったのである。

箸墓古墳は、墳長280m、後円部径150m、前方部前面幅130mの前方後円墳であり、墳形は撥型である。
墳丘には葺石がしかれ、後円部5段、前方部４段の段築で構成され、後円部上段に大きな円形壇が造られている。この円壇には多量の石が積まれた積石塚である。
副葬品として吉備地方と同型式の特殊壺形埴輪と特殊器台型埴輪が採集されている。また周壕からは馬具（木製の輪鐙）が出土している。周濠は幅約10m程度の周濠と、その外側に15mを越える大きな外堤が巡っていた可能性があり、築造された当初は外堤の所々には渡り堤があったようである。
前方部からの出土土器は布留0式であり3世紀中葉の築造であることが確認され、吉備首長の関与が指摘される。現在箸墓の築造時期は様々な議論があるが、260年頃が有力である。本稿では２５８年を築造年代と考えている。
ここで箸墓をイメージするために、箸墓と同じ積石塚の前方後円墳である、復元された３世紀後半に造られた善通寺市の野田岩古墳の写真を乗せる。手前が円丘部で後が前方部である。箸墓もこのような円壇が後円部中央にあったものと思われる。　【図2積石塚古墳・野田岩復元古墳】

箸墓は卑弥呼の生存時期と重なり、卑弥呼の墓は「径百余里」と『魏志倭人伝』に記され、後円部の径が約150mであり符合する。
また「棺あって槨なし」との記述は『魏志倭人伝』の関係者は、畿内に足を踏み入れてなく、北部九州の事情しか把握していない故の表現であろう。箸墓も二重槨で立派な木槨の中に木棺が埋納されているものと推理する。

図２　積石塚古墳・野口岩復元古墳

何故本稿が箸墓の被葬者を卑弥呼と断定したのか、古墳からの考察であり以下その過程を述べる。
先に述べたが前方後円墳の祖型と思われる古墳が、阿波（徳島県鳴門市）に220年頃築造の萩原２号墳がある。墳丘は20mの円丘に方形部の突出部が付いている。円丘の中心の埋葬施設は石囲いの木槨で、朱を内側に塗った木槨に棺を収め、砂岩を積み重ねた壁で全体を覆っている。国内最古の積石塚墓である。附近には230年頃築造の萩原１号墳があり、同構造で破砕された画文帯神獣鏡が見つかっている。
浪漫を膨らませると、卑弥呼の父の墓かもしれない。
このように箸墓が讃岐や阿波の東部瀬戸内地域から大きな影響を受けていることが想定される。

ここで注目すべきはホケノ山古墳である。前方後円墳の箸墓古墳に繋がる古墳である
ホケノ山古墳は、全長80m、円丘３段築成で径55mに、短く低い突出部長25mの纏向型墳丘墓で、三段の段築はそれぞれ1mほどの垂直なきれいな葺石が敷かれ、周濠がある。
ホケノ山が撥型（確定していないが撥型らしい）であったなら、撥型の箸墓はここから生まれたのかもしれない。
主体部の埋葬施設は川原石を積んで壁をつくり、木材で上部を塞いだ木蓋（もくがい）の石槨（せっかく）部分と、その内側に設けられた木槨部分からなる二重槨である。このような重槨構造は、大和地方では新しいものであった。木槨部分は長さ約6.5㍍、幅約2.6㍍の大規模なもので、内部に長大な高野槙製の舟形木棺を納める。槨の上部には装飾をほどこした壺形土器が配列されその上に地元の川原石を積んで、棺内は水銀朱で覆われていたと思われる。
簡単に語れば、木棺は木槨で守られ、さらに石囲いで覆われ、その上に川原石で積まれている、手厚い埋葬方法である。このような石囲い木槨という構造そのものは吉備や讃岐・阿波・播磨地域で散見されるものであり、更に積石塚であるのは阿讃地方に見かける構造である。250年頃の埋葬と想定される。確認できないが恐らく箸墓の埋葬施設もホケノ山古墳と同等の重槨構造であったと推測される。
後に埋葬された木棺が二つあり、4世紀頃にくびれ部に1体埋葬され、更に６世紀末に横穴を掘ってもう１体埋葬されている。出土品は、瀬戸内系77ｃｍの大型壺、東海系26ｃｍ中型壺、銅鏃 約60本、鉄鏃 約60本、完形で画紋帯同向式神獣鏡、内化花文鏡片、鉄製農工具、布留０式土器３点などで、この古墳は築造後に再度利用されているためである。３世紀のものと４世紀のものが交じっている。
被葬者は本稿では、卑弥呼より先に亡くなった弟ではないかと考えているが、物証はない。
なおホケノ山古墳の築造時期に関して、木槨木材の炭素年代測定結果の幅が4世紀前半をも含むと報告されているが、この板材は４世紀に修復したか、盗掘など別の要素で置かれたものであろうと推測する。

2.卑弥呼についての『魏志倭人伝』の記述

卑弥呼については「魏志倭人伝』から導き出すことと、纏向や古墳から併せて検証を進めて行こう。

『魏志倭人伝』で語られる卑弥呼は、
鬼道に通じ、その姿を人前に現すことは少なかった。弟がいて政治を補佐した。
宮室や城柵を厳かに設けて、兵が常に守り、一人の男性が居所に出入りし、食事の世話などをした。また卑弥呼の言葉を人々に伝えた。（何故女性でなかったのか不思議である）
239年（景初3年）大夫の難升米が洛陽迄訪れて、男の生口（奴隷） 4 人、女の生口 6 人などを献上し、
魏から親魏倭王の金印を授かり、銅鏡100枚も授かった。これは魏は公孫氏を238年に滅ぼし楽浪郡と帯方郡を制圧する。これに対応し、卑弥呼は遅滞なく使いを出した。
240年（正始元年）に帯方郡から魏の使者が倭国を訪れ、詔書、印綬を奉じて倭王に拝受させた。
243年（正始4年）倭王は大夫の伊聲耆、掖邪狗ら8人を魏に派遣、掖邪狗らは率善中郎将の印綬を受く。
245年（正始6年）難升米に黄幢を授与されたが、黄幢は帯方郡に留め置かれた。
247年（正始8年）倭は載斯、烏越らを帯方郡に派遣、当時、卑弥弓呼が治める狗奴国との戦いを報告した。
魏は張政を倭に派遣し、難升米に詔書、黄幢（帯方郡にあったもの）を授与。
248年（正始9年）卑弥呼が死去。墓を造り径は100余歩である、殉葬された奴婢は100余人である。
248年（正始9年）以降 - 男の王が立つが、国が混乱し互いに誅殺しあい千人余が死んだ。
そこで卑弥呼の宗女「壹與（台与、壱与）」を13歳で王に立てると国中が遂に鎮定した。
倭の女王壱与は掖邪狗ら20人に張政の帰還を送らせ、掖邪狗らはそのまま都に向かい男女の生口30人と白珠5,000孔、青大句珠2枚、異文の雑錦20匹を貢いだ。
因みに魏は265年に滅び、魏志倭人伝は280年に著されている。
これ等から考察されることが、
先に述べたが本稿では卑弥呼が邪馬台国の女王となったのは、改めて233年と確認できた。
桃核が纏向遺跡で約2,800個出土されている。吉備の上東遺跡で見つかった桃核と同様であり、これが卑弥呼が行っていたと言われる鬼道かもしれない。
邪馬台国は伊都国に一大率が置かれて、中国への窓口とした。邪馬台国に鉄が少なかったのは、必要性の問題からであろう。

3.卑弥呼の出自と治世

卑弥呼の出自は、先に触れた通り阿波であると考えている。
邪馬台国のトップを選出するには、特定の集団でなく平等性が保たれなければならない。従って普遍的な地域からの選出でなけれならず、阿波の姫・卑弥呼が、正に相応しいのであろう。
阿波では一宮である大麻比古神社があり、大麻と所縁の深い地方である。そして古来から大麻が自生して衣料の材料として利用されていたようである。卑弥呼の鬼道とは大麻を燃やしてその香を利用したものであったのか。

今迄の弥生時代の祭祀は銅矛・銅鐸の祭であったが、これを廃絶させたのは、それらに代わる「倭国統合の象徴」として卑弥呼が登場し、卑弥呼が配布する銅鏡が倭国と個々の首長との関係を表す象徴になったからではないか。（春成秀爾氏）卑弥呼は銅鏡を治世の道具とし、つまり宗教改革を行ったのである。
その銅鏡が三角縁神獣鏡であり、邪馬台国が作った仿製鏡であろう。卑弥呼が魏から貰った100枚は箸墓に埋葬されたのかも知れない。その一方吉備で誕生した特殊壷・器台は，3世紀中頃には箸墓古墳など最古の前方後円墳を飾る埴輪の祖型として採用される。

卑弥呼の外交は、安定を図る目的で中国に朝貢することであったのであろう。
卑弥呼の朝貢は当初から志したが、公孫氏の妨害で叶わなかったという話もあるが、確認出来ていない。
239年に、魏と国交を開く目的で、朝貢し魏は卑弥呼に「親魏倭王」の称号を与えた。驚くことにこの朝貢は、魏が公孫氏を亡ぼした翌年であり、慶賀の意味も込めた朝貢と思われ、国際情勢に通じた政治家であった。
これが後の倭の五王の朝貢の鏡となったのであろう。240年魏の使者を邪馬台国へ使わしたり、243年には、邪馬台国が使者を送るなど、親善と友好が深められた。
当時の魏は呉・蜀と拮抗している中で三国鼎立の時代にあった。そこで呉・蜀を牽制するために同盟国として邪馬台国との関係を維持する必要があったと考えられ、邪馬台国の卑弥呼は国力からみて過剰な待遇を受けた。

政治と行政面は卑弥呼の周辺ではっきりしている人物が弟と卑弥呼の伝言者であり、これに吉備の首長が加わって行っていたのであろう。卑弥呼の言葉を伝えたとされる人物は卑弥呼の身内で信頼ある人間であったと推理する。その役割はよく分からないが、この人物も政治に参画していたものと推測される。
そして卑弥呼の政治面は卑弥呼の弟を中心に吉備の首長がこれを補佐して営まれたものと推測される。弟は統治を司る主導的な立場であったと思われ、実際有能な弟であったのであろう。そして吉備の首長も発言して周囲から広く意見を聴取していたのであろう。北部九州も加わって、最終的には合議を持って図っていたのかも知れない。
ところが政治面を担っていた弟が亡くなってしまい、狗奴国との争いが起こったのではないか。
この争いに卑弥呼は苦慮して、247年狗奴国との戦いを報告し、魏は張政を派遣して証書、黄幢を授ける。
卑弥呼はこの戦いに手を焼いていたので、魏に助けを求めると共に、魏からの圧力を期待したのであろう。
248年頃卑弥呼は死んだ。
『魏志倭人伝』では卑弥呼の死後、男子の王が立てられた。これは邪馬台国側が狗奴国に敗れ、政権を降りざるを得なかったのであろう。この男子の王とは、争っていた狗奴国王卑弥弓呼であろう。

葬送儀礼は吉備で行われていたものがヤマトに引き継がれる。例えば水銀朱、弧帯文、特殊器台、特殊壺、円筒埴輪などは吉備を起原とするものである。

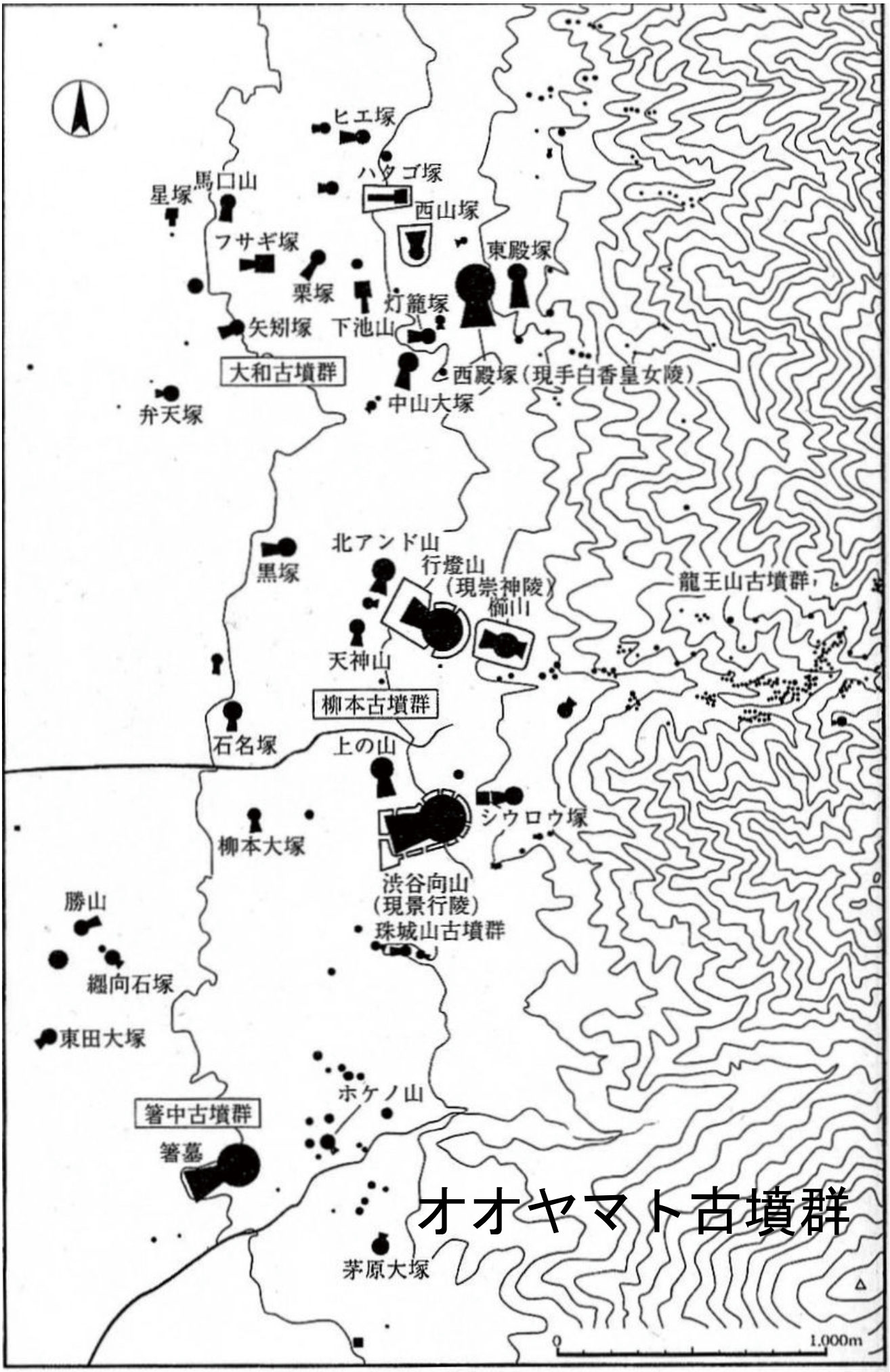
4.邪馬台国に関連する古墳

ここで卑弥呼や邪馬台国を支えたり支持した人々の古墳と３・4世紀の古墳を列記して述べよう。
先に述べた通り、政権運営を担ったのが卑弥呼の弟であり、また卑弥呼の身内である伝言者であり、その古墳が弟はホケノ山古墳で、卑弥呼の伝言者の古墳が椿井大塚山古墳が想定される。
政権を支えた地元ヤマトの首長の古墳が黒塚古墳が想定される。吉備首長の古墳が中山大塚古墳が想定される。北部九州の首長の古墳が柳本大塚古墳が想定される。

この３世紀から４世紀の古墳は、奈良盆地の東南の山麓に沿って、箸中古墳群、柳本古墳群、大和古墳群でありオオヤマト古墳郡と呼ばれる地図を次頁に表す。

・椿井大塚山古墳
撥型で、墳丘長175m、後円部の高さ20m、箸墓の2/3の相似形である。3世紀末の280頃の築造であろう。
古墳のある場所が古代の山背古道（やましろ）の一部で、山背古道は北は城陽から南は木津までJR奈良線に沿って伸びる古代の官道であり、木津川流域の山城の地を卑弥呼が与えた。これはよく尽くしたからのご褒美であるが、大和の地を与えることは不可能で山城とした。現状古墳のくびれ部がJRで分断されている。
三角縁神獣鏡が32面、内行花文鏡2面、方格規矩鏡1面、画文帯神獣鏡1面等鏡40枚が出土している。

・黒塚古墳
墳長130mの前方後円墳で、後円部径約72m、高さ約11m、前方部長さ約48m、高さ6m、後円部3段、前方部2段で、前方部と後円部の落差が大きい260年頃の築造である。撥型で浦間茶臼山古墳と黒塚古墳は箸墓古墳の2分の1に企画された可能性が高い。
未盗掘であったので判明した点で最も特徴的なのが、規模の大きな石室は屋根不要の合掌式であることである。そして木棺は長大な高野槙の割竹形木棺を安置している。石室内には朱が塗られ、粘土床には10キロを超える水銀朱が、木棺を取り囲む様に三角縁神獣鏡33面とそれよりも少し古い画文帯神獣鏡1面が頭部に、埋葬当時に近い状態で発見された。他に刀剣類27口、鉄鏃170本、甲冑等である。三角縁神獣鏡の出土数では、日本一である。この鏡は仿製鏡で卑弥呼が作ったものであろう。
想定される被葬者は大和地元の首長で崇神天皇の父墓か祖父墓で、恐らく大和人で本流となった首長墳であろう。


ヒエ塚
ハタゴ塚
馬口山
星塚
西山塚
フサギ塚
東殿塚
栗塚
灯籠塚
矢矧塚
下池山
大和古墳群
西殿塚（現手白香皇女陵）
中山大塚
弁天塚
北アンド山
黒塚
行燈山
（現崇神陵）
龍王山古墳群
御山
天神山
柳本古墳群
石名塚
上の山
シウロウ塚
柳本大塚
渋谷向山
（現景行陵）
勝山
珠城山古墳群
纒向石塚
東田大塚
ホケノ山
箸中古墳群
箸墓
オオヤマト古墳群
茅原大塚
0
1,000m

・中山大塚古墳
260年頃築造、墳長120m、後円部径73m、後円部高さ11mで吉備の要素の濃い特殊器台の破片が発見された。石室の中からは割竹形木棺が確認された。箸墓古墳に次ぐ最古級の前方後円墳で撥型と推定されている。被葬者は、卑弥呼に仕えた吉備の首長であろう。

・柳本大塚古墳
270年頃築造墳長約94m。後円径54m。舟形の刳抜式木棺（長さ約2m、幅約1.2m）で同棺からは銅鏃と鉄器が出土した。前方部の正面は弧状であるが、撥形のように広がっておらずむしろ狭まっている。
これが後の柄鏡形の原形となったのかも知れない。直径1mの不正円形の小石室が設けられ、径39.7ｃmの大型仿製内行花文鏡が納められていた。この小石室は、板石が天井の方にせり出した合掌式石室で副葬品埋納の副室と考えられている。また鏡を単独で副葬していたことから、鏡を格別に重視していたと考えられる。この副室が鳥見山のメスリ山古墳の原形であろうか。
この被葬者は、鏡を重視していることから、北部九州の特に伊都国人が想定される。

・東殿塚古墳
290年頃築造、墳長139m、この古墳の特徴は後円部と前方部の比は、1:1.5であり、前方部が長く、大王墳である桜井茶臼山の柄鏡形の原形かもしれない。そして前方部西側の一角から造り出し的な祭祀遺構が見つかり、そこから多量の埴輪片が出土した鰭付円筒埴輪に描かれた船の線刻画で1号から3号まで3つの船で3つの船画である。墳丘を取り巻く円筒埴輪が並べられていたものと想像される。
想定される被葬者は、後に語る。

図３　大和古墳群展望

向日市や長岡京市の古墳は邪馬台国の影響が大きな古墳である。
・五塚原古墳は、280年頃築造で墳長91m撥型に開き、全古墳中唯一、箸墓と同じ斜路状平坦面を持ち、纏向型の東田大塚古墳と近似形とされる。
・元稲荷古墳は、290年頃の築造で墳長94mの前方後方墳である。墳丘の規模は箸墓古墳の3 分の1で、前方部と後方部の長さの比率も箸墓古墳と同じ比率である。西求女塚古墳と同形墳である。
また前方部が西殿塚古墳の前方部と相似形である。前方部が撥型である。
播磨・伊予地区の豪族達の古墳も邪馬台国の影響を受けた古墳がある。
・西求女塚古墳は、290年頃の築造で墳長９８ｍの前方後方墳で、神戸市明石の首長墳であろう。
・丁瓢塚古墳（よろひさごづか）は姫路市勝原区にある墳長100mの撥型の前方後円墳である。築造時期は定かでないが300年頃と推測される。

・３世紀末の揖保川町の規模は小さいが養久山１号墳墳長32mは撥型である。
・妙見山１号は、300年頃の築造で、愛媛県今治市の墳長56mの撥型の前方後円墳で埋葬施設の石室は後円部と前方部に各一室あり。

吉備の古墳は、
190年頃築造の楯築遺跡は弥生墳丘墓として第一の規模であり、吉備が倭国王ともいえる地位にあった。その後大きく分かれて３地域に分裂した。
それが旭川下流域は網浜茶臼山古墳が270年頃築造から、吉井川流域は浦間茶臼山古墳となり、備中中心部は310年頃築造の中山茶臼山古墳から380年頃築造の尾上車山古墳となる。
浦間茶臼山古墳は、280年頃の築造で岡山市の墳長138m、箸墓の1/2である。葺石があり、最も古い埴輪である都月型円筒埴輪も。割竹型木棺には朱が施され、椿井大塚山古墳、黒塚古墳と同時期に築造された古墳と推定される。
湯迫車塚古墳は岡山市の280年頃の築造で墳長48mの前方後方墳である。

中国・九州の古墳は、
竹島古墳は山口県周南市の300年頃築造の墳長56m。
石塚山古墳は苅田町の270年頃の築造で、墳長120m、邪馬台国九州説の卑弥呼の墓。
宇佐の赤塚古墳は280年頃の築造で墳長58m。
このように３世紀の古墳が地方への撥型古墳と三角縁神獣鏡の普及は、大和から中国と四国地方から宇佐を経て北部九州までは、邪馬台国の支配が及んだ地方であった域内で在ったことが判る。

ここで椿井大塚山古墳の三角縁神獣鏡との同范鏡が埋納されていた古墳をまとめると、
32面の椿井大塚山古墳を筆頭に、岡山県湯迫車塚古墳11面、福岡県石塚山古墳７面以上、大分県赤塚古墳５面、兵庫県吉島古墳４面、山口県竹島古墳２面、福岡県那珂八幡古墳１面の順となる。
黒塚古墳の三角縁神獣鏡は同范鏡でない。

ヤマトの３世紀から4世紀の古墳は、邪馬台国と関係性がはっきりしないが、
同じ時期に営んだ古墳が大和古墳群の天理市成願寺町・萱生町周辺にある。これ等は247年の狗奴国抗争の後に、この地域に急増していることから、東海勢力（狗奴国）の被葬者が含まれていると考えられる。
マバカ古墳は、全長80mの纏向型前方後円墳で250年頃の築造である。
ノムギ古墳は、全長63mの前方後方墳で280年頃の築造である。
ヒエ塚古墳は、全長129mの撥型前方後円墳で300年頃の築造である。
フサギ塚古墳は、全長110m（成願寺町）の前方後方墳で350年頃築造。

大和古墳群に吉備関係の古墳が多くあることから吉備人が多く大和に移住したものと思われる。
・馬口山古墳は、２９０年頃築造、墳長110m
・燈籠山古墳は、310年頃築造、墳長110mの前方後円墳で埴輪列が墳丘を囲んでいたと考えられる。埴製枕（はにせいまくら）が見つかる。
・波多子塚古墳は、天理市萱生町にある墳長140mの前方後方墳で290年頃築造である。特殊器台型の埴輪をもつ、後方部にも竪穴式石室があり、前方部にもなんらかの施設があったと考えられる。
・下池山古墳は墳長120mの前方後方墳で310年頃の築造である。北西側からは小石室が検出され、その内部で大形の内行花文鏡が発見された。築造時期や前方後方墳であること等からこの被葬者は尾張氏の崇神妃妃尾張大海媛が想定される。

5.男王の短い時代

『魏志倭人伝』では、248年頃卑弥呼の死後、男王を立てたが紛争は治まらず、互いに誅殺しあい千人余が死んだ。そこで卑弥呼の13歳の宗女壱与を立てると国中が遂に鎮定したとある。

これは、卑弥呼と争っていたのは、狗奴国の卑弥弓呼と思われ、この狗奴国王が本書では男王と推測し、王位に就いたと思われる。
しかし男王の時代は長くても半年で、恐らく数か月と短く248年中に壱与が就任したものと思われる。
就任に先立つ247年に魏から派遣されていた張政を帯方郡まで送り、派遣されていた掖邪狗らはそのまま都に向かわせた。これが247年に卑弥呼が派遣した遣使を引き継いだ壱与の248年の遣使である。

狗奴国が邪馬台国と争うようになったのは、、邪馬台国が直接魏と交流を持った故であろう。これは想像であるが、今迄は狗奴国と北九州諸国だけが中国と交流をしていたが、ヤマトの邪馬台国が交流を持ったことが、狗奴国にとっては邪馬台国に変わられると危機感を持った故であろうか。それは鉄の入手が困難になってしまう恐れからで、更に隣国であるから故なのかもしれない。狗奴国は、邪馬台国の東にある東海から尾濃地区を支配していたと考えている。
狗奴国側でも大きな要因として卑弥弓呼も亡くなって狗奴国の統治体制が崩れたのかもしれない。

結局卑弥呼は、245年と247年の２回魏に援助を求め、そして247年に張政が派遣されている。卑弥呼の死後数ケ月間男王が盟主となるが、国内が混乱して壱与が継いで安定した。

6.壱与の時代

壱与は就任と同時に卑弥呼が派遣した遣使をそのまま洛陽迄派遣している。
これは卑弥呼と同じ統治体制を志したものであろう。
265年に魏が滅び西晋の時代となる、266年壱与はすかさず西晋に遣使する。（晋書）これは多分慶賀の使いであろう。以後中国側に記録が途絶え、日本側にも文献資料がなく、証拠として残っているのが古墳となるので古墳から推理を飛ばしてゆこう。以下記録に乏しく推理する部分が多くなってしまうが、ご容赦戴きたい。
これから空白の４世紀に至るのである。

壱与は13歳で即位したが、卑弥呼と同じように兄か弟がいた。
そして実際の政権運営は、この兄弟が担ったであろう。しかし兄弟も幼いと思われるので不安定である。壱与の最初の仕事が箸墓の造営であり、260年頃箸墓は完成したものと思われる。次の仕事が、自身の陵墓である西殿塚古墳の造営であり、280年頃に完成している。

壱与の古墳が西殿塚古墳であり、傾斜地に立地している撥型古墳で箸墓と相似形と言われる。墳長230m、後円径140m、東側で3段築成、西側で4段築成。前方部は幅130m、東側で1段築成、西側で2段築成。方形壇は前後にあり、後円部：東西25.15m、南北26.54m、高さ3m。前方部東西12.92m、南北 14m、高さ1.87m。この方形壇も石積である。築造時期は280年頃であろう。副葬品は特殊器台も出土し箸墓とほぼ同じである。被葬者は後円部に壱与が、前方部に兄弟であろう。
この様に西殿塚は、兄弟墳であるが同じ思想の箸墓も兄弟墳でないかという発想が浮かんでくる。つまり「箸墓の円壇は広大であり、ここに姉弟が埋葬されているのでないか。」（白石太一郎氏）
壱与の政権は、248年から260年位の12年間であろうと想定される。そして壱与の死は290年頃であろうか。壱与が即位後も狗奴国からの圧力も引き続き強まり、鳥見山での軍事的な抑えが必要であった。
そして狗奴国からの脅威もあり、また壱与もまだ若く、不安定な政権運営あったのでは、と想定される。
邪馬台国はこの二代で一応終焉したものと思われる。

7.鳥見山政権

壱与政権を支えたのが、鳥見山に拠点を構え武力を保有している桜井茶臼山（外山茶臼山）古墳の被葬者であろう。鳥見山は大和盆地の南側の要衝であり、狗奴国は恐らくここから攻撃を邪馬台国に仕掛けたものと思

われる。そして、記紀で語られる神武天皇の大和侵攻は、狗奴国の例を見倣って創作されたものと思われる。この狗奴国からの脅威を守ったのが桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳の被葬者である二人の武将であったと思われる。そして、両武将は、壱与の政権下でも鳥見山に陣を構え邪馬台国に仕えたものと想定される。二人は周囲からも正当性が保証される立場でなければならず、邪馬台国を支えた吉備か北部九州の出自でないと叶わなかったものと思われる。
壱与が退位した後に、既に実権を握っていた桜井茶臼山古墳の被葬者が、邪馬台国の大王を継承したのであろう。そして二人の武将の力により、狗奴国の軍事力の脅威も弱まり、邪馬台国から新たな国家をスタートさせたのかも知れない。
男王二代が続いたのは、決して男王継承が芽生えたのでなく、たまたまの結果であると考えている。やはり女性継承が継続されたものと考えている。

それでは二人の古墳について述べよう。
桜井茶臼山古墳の被葬者は独自の墳形を作りたかったので、撥型から脱皮して、膨れている部分を長くした柄鏡型の大王墳を造ったのであろうか。それが桜井茶臼山古墳である。大和古墳群の東殿塚古墳も前方部が長くこの大王の妃かも知れない。
桜井茶臼山古墳は、尾根を利用して造られた墳長200mの290年頃築成された前方後円墳である。後円部３段、前方部２段で築成して、後円部径110m、前方部幅60mの柄鏡型の墳形である。
後円部墳頂の中央に方形壇があり、その下に竪穴式石室が築かれている。石室は約6.7m長、1.3m幅、1.7m高さで壁全面に朱が塗られていた。高野槙の木棺が残っていた。方形壇を見えにくくするために、方形壇の周りを取り囲むように太い丸太の丸太垣が確認された。
副葬品は膨大な数の鏡の破片で、恐らく100枚以上の鏡が副葬されていたと想定される。分かっているだけで三角縁神獣鏡が26面、内行花文鏡（仿製10面、舶載9面）等9種類以上である。鉄製品の武器や工具や碧玉がついた玉杖や石製品が見つかっている。
被葬者を大胆に推理すると、狗奴国との戦いに参戦した武将が連想され、北部九州系の柳本大塚古墳の被葬者が父親であろうか。そして妃は東殿塚古墳の被葬者でなかろうか。この妃は遠賀川河口の岡を本貫地とする海神系の氏族集団の安曇同族であったので、船が描かれた埴輪が副葬されたのかも知れない。東殿塚古墳に埋葬されたのは、継承を正当化されていることを見せる為に、壱与の西殿塚古墳に向かい合う形で盟主墳と同等と位置付ける目的で東殿塚古墳を造ったものと本稿は考える。
もっと発想を飛ばすと壱与の妹をこの大王が娶り、継承を正当化したのかもしれない。
この大王の治世は、260から280年頃と推測する。

メスリ山古墳は、丘陵上に造られた墳長240mの310年頃築成された前方後円墳である。後円部３段、前方部２段で築成して、後円部径128m、前方部80mの柄鏡型の墳形である。
後円部の高さ20m、前方部9mで纏向型を倣って、小石室は柳本大塚古墳や下池山古墳を真似たのであろうか。後円部墳頂には長さ8m幅1.8mの竪穴式石室が築かれている。主室と東側に長さ6mの副室が設けられている。主室は盗掘され鏡の破片や石製品等が出土し、副室は盗掘を免れ柄のついた鉄槍の上に鉄製弓・鉄製矢・鉄製刀剣。斧・のみ・槍かんなの鉄製農工具や玉杖が置かれ、更にその上に銅鏃と石鏃を付けた矢が置かれていた。これら鉄槍は212本、銅鏃は236本、石鏃は50本と凄い数量である。また大量の武器は狗奴国との争いも終結し、もう戦う必要のない事からであろうか。
後円部には主室を中心とした周囲南北18m、東西13mの範囲に大型の円筒埴輪を二重に並べ、桜井茶臼山古墳の丸太垣を円筒埴輪（2.4m高）に置き換えたもので、両古墳に繋がりが感じられる。図4メスリ山古墳の埋葬施設の埴輪列を参照ください。
被葬者を大胆に推理すると、強大な権力を持った武将が連想され、埴輪を最重視する葬送儀礼であり、吉備系の中山大塚古墳を父か祖父に持つ人物と思われる。そしてこの姫が御間城姫でなかろうか。更にその妹を母にに持つのが佐紀の沙穂姫命と推測される。
そうだとするなら、被葬者の妻が春日建国勝戸売であり、御間城媛と沙本大闇見戸売（さほおおくらみとめ）の姉妹を産み、沙本大闇見戸売は恐らく春日氏の当主に嫁ぎ、沙穂姫命と沙穂彦王の兄妹を産んだのであろうと推測される。（ヤマト王家の想定系譜を参照）春日建国勝戸売とその父の墓が大和古墳群の波多子塚古墳

と想定され、沙本大闇見戸売の墓が至近にある燈籠山古墳であろうか。
崇神天皇が御間城姫に入り婿して継承権を継ぎ、垂仁天皇が孫娘の沙穂姫命に入り婿して継承権を確保したものと推測する。
更に発想を飛ばすと、メスリ山古墳の被葬者の正妻が桜井茶臼山古墳の被葬者を父に持つ人物であろうか。メスリ山古墳の大王の治世は、280から300年頃と推測する。
記紀から考察すると大彦命が相当すると思われるが、実在が確認できない人物である。

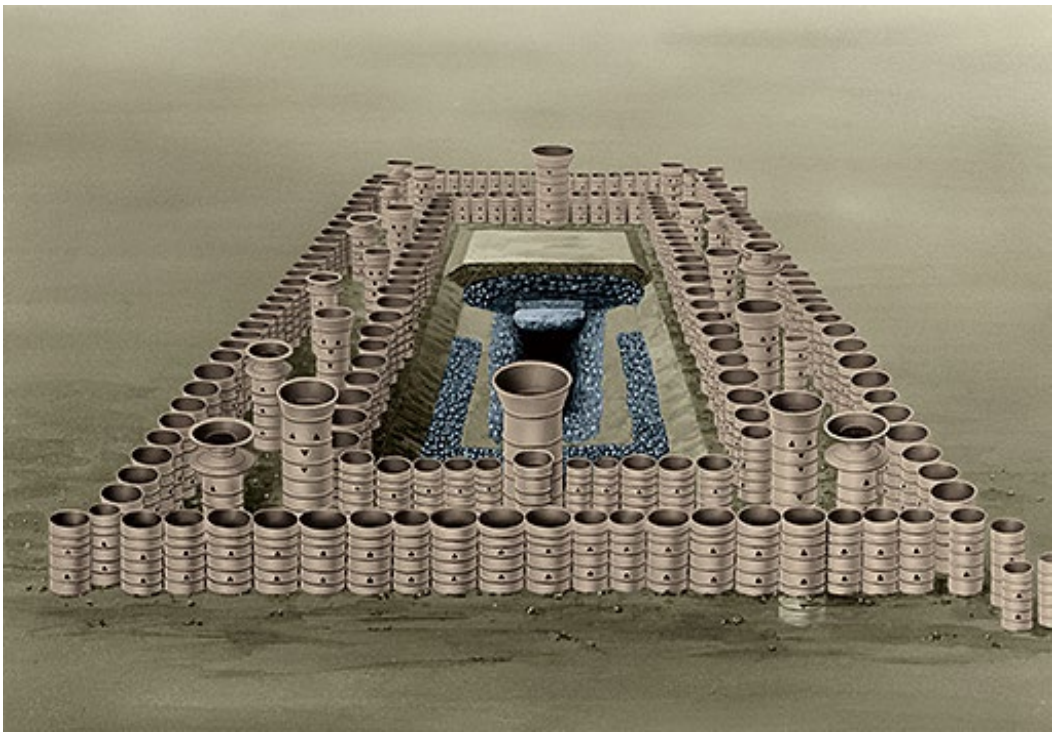


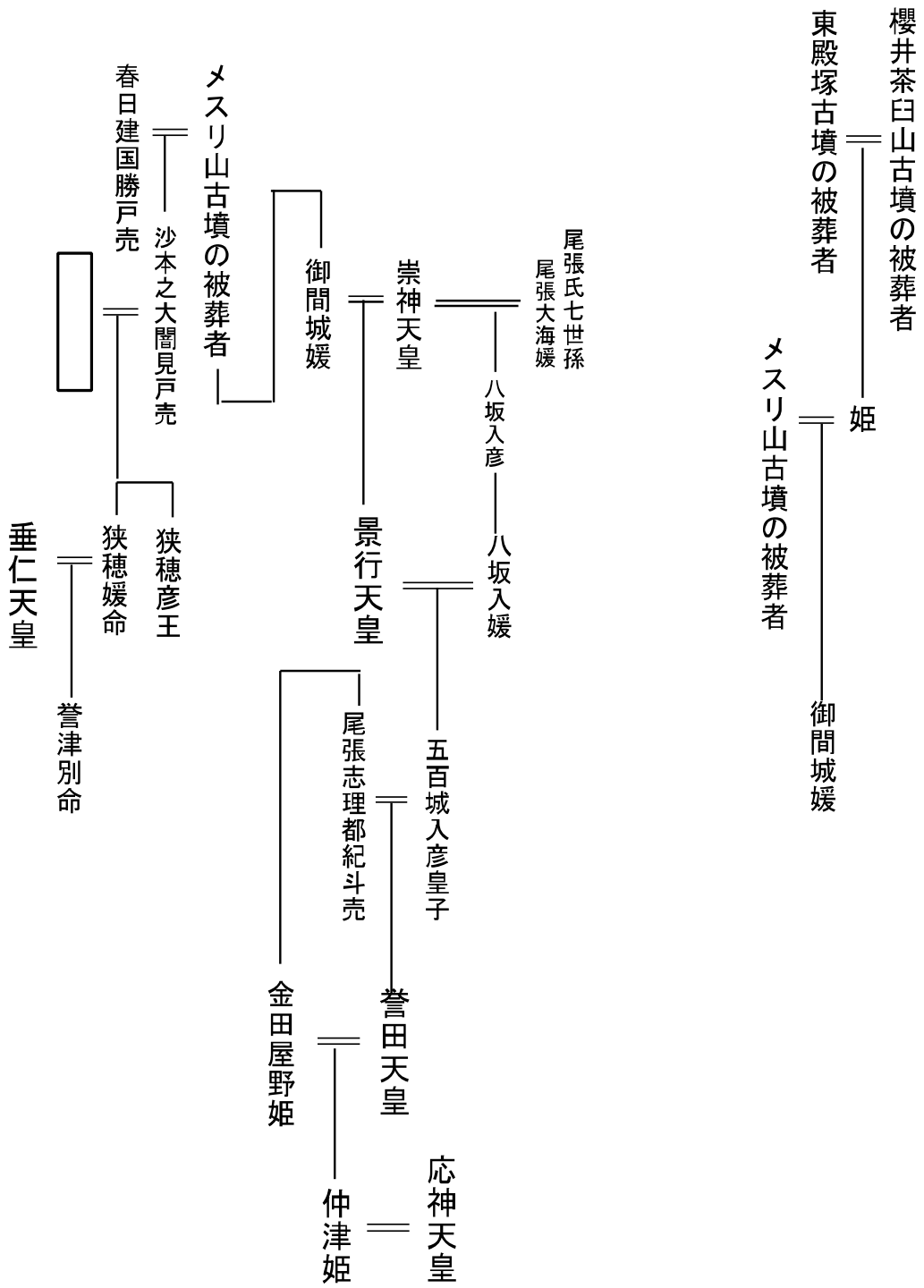
図４　メスリ山古墳の埋葬施設

メスリ山古墳の被葬者の妃の墓が摂津の池田茶臼山古墳が、播磨に白水瓢塚古墳があり、これらはメスリ山古墳の1/4の相似形である。
柄鏡型の古墳は、時代が下るが、吉備の４世紀後半の墳長138mの尾上車山古墳が、肥前の4世紀末の墳長98mの金立銚子塚古墳があり各々鳥見山古墳の被葬者の1～-2世代後の吉備と肥前の首長墳であろう。

8.初期ヤマト王権

この時代の記紀も創作や作為が多く、実態とかけ離れていると感じている。
先ず、大王墓である鳥見山にある桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳は語られていない。
崇神天皇は実在するが、全国を統治するために四道将軍を派遣したと述べているが、この皇族の将軍たち大彦命、吉備津彦命、丹波道主命、武渟川別命の実在が確認できない。
崇神皇后御間城姫は、大彦命の媛となっているが勿論作為であり、女性達には嘘名は少ないと感じている。大彦命は阿部氏の始祖とされていて、阿部氏の本貫地が桜井市阿部でありメスリ山古墳の至近の地である。本稿ではメスリ山古墳の項で述べたが、御間城姫はメスリ山古墳の被葬者の姫と考えている。
垂仁天皇は、崇神天皇の皇子となっているが、垂仁天皇の諱は『日本書紀』では活目入彦五十狭茅天皇（いくめいりびこいさちのすめらみこと）、『古事記』では伊久米伊理毘古伊佐知命（いくめいりびこいさちのみこと）となっており、入り婿して皇位に就いているので、崇神天皇の皇子ではない。
従って次代を継いだ景行天皇は崇神天皇の皇子である。
『日本書紀』『古事記』（以下記紀）など文献資料の確認できる事項は、そのまま活用し確認できない事項については、古墳から歴史を紐解いて行かなければならない。

ヤマト王家の想定系譜



8.1.崇神政権の誕生

狗奴国の脅威もなくなり、この軍事重視国家の必要性もなくなり、純大和人と思われる崇神天皇が即位した。
崇神天皇の諱は多くあるが、記紀では、
御肇國天皇（はつくにしらすすめらみこと）『日本書紀』
御間城入彦五十瓊殖天皇（みまきいりびこいにえのすめらみこと）『日本書紀』
所知初國御眞木天皇（はつくにしらししみまきのすめらみこと）『古事記』
御眞木入日子印恵命（みまきいりひこいにえのみこと）『古事記』
この名から記紀では共に初めての天皇と述べ、御間城姫に入り婿して継承したことが判る。

崇神天皇の祖先は、地元大和の磯城地方の豪族と思われ、纏向遺跡の土地も領し、纏向建設には協力したものと思われる。そして父は邪馬台国の時代によく仕えた人物で、黒塚古墳に埋葬されたと推測する。或は黒塚古墳の被葬者の孫と推理する。大王メスリ山古墳の被葬者の娘御間城姫に入り婿して、継承権を確立して正統性が確保され王位についたと想定され、周囲もこれを認めた。
即位後、丹後地域を統制下に於く為に、崇神政権は丹後の取り込みを図り、景行天皇の次期天皇を約し、条件として景行天皇を丹後側が補佐することが決められた。

そして初期ヤマト王権は拡大する。
崇神天皇の施政下では、出雲を除く西日本全域と南九州の一部を除く九州全域を治め、東日本の狗奴国は弱体化しつつあり、影響を東日本にも及ぼすことが出来、ほぼ倭国を治めることとなったと推測する。
崇神天皇が纏向を消滅させている。これは邪馬台国からの決別を表明したものと思われる。つまり崇神天皇は卑弥呼とは全くつながらない人物である。
崇神天皇の死は318年と云われる。崇神天皇の治世は300年から318年と推測される。

行灯山古墳は、大和天神山古墳と櫛山古墳に挟まれた地に立地する。
墳長242m、後円部径約158m、後円部の高さ約31m、前方部の幅約100m、前方部の高さ約13.6m。3段築成で葺石・埴輪・周濠を備える。出土品は円筒埴輪・土師器・須恵器のほか、江戸時代の修陵の際に出土した銅板1枚があるが現在所在不明である。
330年頃築造の崇神天皇の陵墓である。
陪塚は、北アンド古墳は墳長120m、南アンド古墳は墳長65mと大和天神山古墳は墳長103mである。宮内庁の管理が行き届いていて、人体埋葬がなく副葬品のみをを納めている。
大和天神山古墳
310年頃築造、櫛山古墳の真反対にあるのが大和天神山であるが、埋葬の痕跡がないが朱があり、三角縁神獣鏡が32面が石室の壁面に並んでいるのは父祖の黒塚古墳の埋葬方法を見倣ったものであろうか。

櫛山古墳
320年頃築造。墳長約155mの双方中円墳。円丘部直径約90m・高さ約17.5m、3段築成で葺石・埴輪を備え、周濠を持つ。長さ 7.1mの竪穴式石室と長持形石棺の一部がみつかり、腕輪形石製品類や鉄製品などが出土した。
行灯山に異常に近く築造されているので、行灯山の被葬者の行く先を見守るという意図のもと築造されたのかも知れないが、行灯山古墳に極力近づけたために双方墳の片方が短くなってしまった。
被葬者は吉備人で、父がメスリ山の被葬者で、その子で御間城姫とは姉弟に当たるかもしれないと推理する。

西山古墳
330年頃築造。国内最大の前方後方墳であるが、後方墳の上に前方後円墳がのる特異な形状である。つまり墳丘は三段築成で、中段および上段が前方後円形、下段が前方後方形である、墳長183m、後円部幅94m、高さ16m前方部幅72mであり、周濠が巡る。斜面には葺き石が、埴輪片がみられ、円筒埴輪、鰭付円筒埴輪、家形埴輪が見つかっている。破壊されている竪穴式石室付近から銅鏡片、碧玉製鏃、管玉、鉄剣・鉄刀片が出土している。
外堤が確認され、3基の埋葬施設が見つかり、殉葬かも知れない。
この古墳は、前方後円墳と前方後方墳を統合したことにより、両古墳形式を信奉する集団の和合を図ったものと思われる。
この被葬者は崇神皇后御間城姫と推理する。

8.2.景行天皇

先に述べたが記紀での継承は、子の垂仁天皇となっているが、垂仁天皇も又崇神天皇と同じく入り婿して継承権を得た人物で崇神天皇とは何の血脈を持たない人物であり、崇神天皇の子は景行天皇であり、景行天皇が継承したと考えている。

景行天皇の実在に異を唱える説もあるが、立派な古墳も有し実在は間違いないものと思われる。
景行天皇は記紀では垂仁天皇の第三皇子とされ、伝説面も多くその子息に実在しない日本武尊や成務天皇を挙げている。日本書紀には皇后に若建吉備津日子の姫である播磨稲日大郎姫の間に第二第三皇子に双子の大碓皇子と小碓尊（日本武尊）を生んだ後、崩御したので、新たな皇后に八坂入媛命（崇神天皇の孫）とし七男六女の母である。成務天皇・五百城入彦皇子・忍之別皇子・稚倭根子皇子・大酢別皇子・渟熨斗皇女(渟熨斗姫命)・渟名城皇女・五百城入姫皇女・麛依姫皇女・五十狭城入彦皇子・吉備兄彦皇子・高城入姫皇女・弟姫皇女。成務天皇は景行天皇の第四皇子とされ、架空人物である武内宿禰（モデルが存在したと思われる）を大臣としている。皇太子に架空の兄日本武尊の子仲哀天皇を立てた。架空に満ちた人物に囲まれ成務天皇も架空と思われる。神功皇后は応神天皇の母で仲哀天皇の皇后とされているが、当然架空の人物である。この内確認できる人物は、五百城入彦皇子、渟熨斗皇女(渟熨斗姫命)等数人であり、これらの他の人物を各地に国造に任命されたとしているが甚だ疑問であり、国造の制度は成務天皇の事績とされているが、景行天皇の時代には国造制度も確立していない。
『古事記』によれば記録に残っている御子が21人、残らなかった御子が59人、合計80人の御子がいたことのなっている。景行天皇の事績は殆どが確認できない。

景行天皇の陵墓は柳本の崇神天皇陵に近い墳長300mの渋谷向山古墳である。この古墳は生前に築造された寿陵であったと想定される。渋谷向山古墳は350年頃の築造で、丘陵の尾根を利用した傾斜地に築かれている。前方部を西に向け墳丘は前方部4段、後円部3段築成と考えられている。後円部の頂部に径42mの平坦面があり複数の埋葬施設の存在が推定されている。後円部径が168mであり、行灯山古墳の158mを若干大きくしているが古墳の設計理念は同一である。
陪塚は、前方後円墳の上ノ山古墳の墳長150mと円墳、方墳各１基である。上ノ山古墳の被葬者は、皇后八坂入媛命であろうか。因みに先の皇后播磨稲日大郎姫の陵墓は播磨加古川市の日岡稜で墳長80mの前方後円墳とある。
景行天皇は345年頃崩御しその在位期間は318年から345年の27年間と推測される。
丹後側の景行天皇への協力は、具体的には伝わっていないが、全国統治に協力したものと思われる。

ここで何故奈良盆地東南部を本拠地に構えた政権が続いたのか、検証してみよう。
争いの無い２代毎の政権交代が行われていることは、何らかの約定があっての交代であったと考えざるを得ない。記紀に見られる男性世襲制でなく、三つの有力豪族から交替で選ばれていたことである。そして継承権は女性が持ち、その女性に入り婿した男性が王位に就くこととなり、更に佐紀政権もこれに続き応神天皇迄入り婿制は続いた。これが三つの古墳群である。
「大王墓である六基の古墳が3世紀の半ば過ぎから4世紀の中頃まで約100年間の倭国王墓であることは疑いえない事実であろう。」（白石太一郎氏）
箸中古墳群と大和古墳群の箸墓古墳と西殿塚古墳、鳥見山古墳群の桜井茶臼山古墳とメスリ山古墳、柳本古墳群の行灯山古墳と渋谷向山古墳である。
その埋葬者が大王であり、女性を盟主とした初代卑弥呼と二代壱与、武威的な三代と四代は男王で、五代崇神天皇と六代景行天皇の二代の親子で、一夫多妻制であるが男系世襲制の萌芽はまだ芽生えていない。これ迄の継承の基本は女系継承でもなく、入り婿制度が基本であるが、これは偉丈夫な男を立てて部族を守る弥生時代からの智慧であろうか。

従って記紀の王位継承は、崇神天皇→垂仁天皇→景行天皇→成務天皇→仲哀天皇→応神天皇となっているが、上記で述べた通り、成務は実在しない。仲哀は父日本武尊母神功皇后と共に実在しない父母であり、当然その子の仲哀も実在しない。本書の継承は、引き続き述べるが、崇神天皇→景行天皇→垂仁天皇→誉田

天皇→応神天皇であると考えている。ヤマト王家の想定系譜をご参照ください。

8.3.佐紀政権（垂仁天皇）

この政権の盟主は垂仁天皇であり、崇神天皇が丹後勢力を勢力下に措いたことから始まる。
ヤマトへの物流は瀬戸内海航路が未だ啓開されていない為航路としての機能が果たせず、日本海航路の丹後はヤマトへの物流を担っていた為に栄えることが出来たのである。
景行天皇の死に伴い次の継承は、予てからの崇神天皇との約定により丹後からの人物が入り婿することが既に決定されていたと想定される。そしてその丹後の人物が入り婿する相手の女性が、メスリ山古墳の被葬者の孫に当たる崇神妃御間城媛の妹の子つまり姪に当たる沙穂姫命に入り婿した人物となる。沙穂姫命の父親は大和北部の佐紀の豪族である春日氏の族長であろう。
丹後側は入り婿する人物として、活目入彦五十狭茅天皇（いくめいりびこいさちのすめらみこと）（後の垂仁天皇）が選ばれた。そして沙穂姫命に入り婿して天皇の継承権を垂仁天皇が確立する。

垂仁天皇とは何者であろうか。
丹後には、４世紀迄野田川流域に居する氏族と、竹野川流域に居する二つの氏族が丹後を統括していた。垂仁天皇は恐らくこの野田川流域の王子であったと思われる。この氏族の象徴的な古墳が350年頃築造の墳長145mの蛭子山一号墳であろう。そして後に垂仁皇后となった日葉酢媛は竹野川流域の王女であったと思われる。春日氏と丹後のつながりは、丹後地方が春日氏の統括地であったので、垂仁天皇の皇后となった沙穂姫命が亡くなる時に日葉酢媛を娶るように促されたのは、丹後の二つの勢力を一つにまとめる意図があったのではないかと推測される。
その後野田川水系に大古墳が無くなり、竹野川水系に大古墳が営まれていることも、その傍証となろう。

垂仁天皇もまた『日本書紀』及び『古事記』に歴史的事実と認められる伝承が少ないので、本稿独自の考察方法で時代を推理してゆこう。
その後皇后の実兄の「沙穂彦王の乱」があったと記紀は言うが、『古事記』中巻では倭建命の説話と共に叙情的説話として同書中の白眉とも評され、また同じく同母兄妹の悲恋を語る下巻の木梨之軽王と軽大郎女の説話と共に文学性に富む美しい物語とも評されている。この乱は垂仁天皇の継承を皇后兄である沙穂彦王が異議を唱え、争いとなったが、あっけなく垂仁天皇が勝利し、二人は焼死したとされる。
亡くなる前に沙穂姫命は「旦波比古多多須美知能宇斯王に兄比売と弟比売という姉妹がいるので、「二人をお召しになれば」と、これは記紀での丹波道主王の姉妹であり、実際は川上麻須郎の娘である日葉酢媛と淳葉田瓊入媛の姉妹であろう。この「沙穂彦王の乱」は証拠もなく作為であると本稿では考えるが、男系継承を切望する萌芽の一つかもしれない。沙穂姫命が先に病で亡くなり、その15年後に沙穂彦王が亡くなったのであろうと想定する。
沙穂姫命は340年頃に築造された佐紀陵山古墳に埋葬された。沙穂彦王は355年頃に築造された宝来山古墳に埋葬された。その立地場所が先に埋葬された佐紀陵山古墳と遠からず近からずの場所にある。

佐紀陵山古墳は、佐紀地方に始めて築かれた大王級の古墳であり、墳長207m、前方部幅87m、後円部径131m、三段築成で周濠の形が鍵穴から盾型に変わった。後円部頂上中央の竪穴式石室は、主軸をほぼ南北に持ち、長さ8.55m、幅1.09mという巨大なものである。その石室上部は2メートルほどに土を盛って小さな円形の盛土を造り、その上に7 - 8個のキヌガサ形埴輪と数個の盾形埴輪が立てられていた。とくに土檀中央の最高所に立てられたキヌガサ形埴輪は大きく、稀に見る丁寧さで作られていた（高さ1.5m、横幅2m）。キヌガサの上部には、複雑な直弧文が一周しさらに四個の突出した部分（ヒレ）も直弧文で飾っていた。盾形埴輪も丁寧な複雑な作りで木製の盾を模したものと推測される。

佐紀陵山古墳は各地で造られる古墳の基本形となった。
・五色塚古墳（兵庫県）は4世紀末頃の築造で、三段築成の各段に円筒埴輪を並べ各段斜面には葺石が敷

かれた墳長194mの大古墳である。立地場所が明石海峡を睨む海から見える威容を示し、航海中の船舶を圧する意味合いが強く込められている古墳であり、これを見倣ったのが後の百舌鳥の上石津ミサンザイ古墳と大仙陵古墳の先駆けである。被葬者は居ないと想定され、瀬戸内海航路の開通により造られた古墳で、築造者は垂仁天皇であろう。
・摩湯山古墳（大阪府）は360年頃築造、墳長200mで五色塚古墳との関連性があるかもしれない。
・御墓山古墳（三重県）は５世紀築造の墳長188m伊賀の首長墳であろう。
佐紀陵山古墳の相似形の古墳は畿内は勿論、全国に散らばっていることから、統治が全国に及んでいた傍証となろう。

宝来山古墳は、墳長227m、三段築成、墳丘周囲には鍵穴形の周濠が巡らされている。出土品としては、宮内庁採集資料として円筒埴輪・形象埴輪（盾形・家形・靫形埴輪）等がある。

更に推理が続くが、ここで関係者について見て行こう。垂仁天皇が入り婿した時期は326年と推測され、306年生まれの垂仁天皇は20歳、308年生まれの沙穂姫命が18歳であった。沙穂姫命が亡くなったのが23歳の331年と思われ、垂仁天皇が陵墓として佐紀陵山古墳の築造が完成したのが340年頃であろう。
沙穂彦王は300年生まれで、死亡年が46歳の346年であろう。垂仁天皇が陵墓として宝来山古墳を355年に築造した。垂仁天皇は345年景行天皇の崩御に伴い、同年に即位した。
沙穂姫命の忘れ形見である誉別津命の生年は、母が亡くなった331年の一年前の330年と推測する。そして345年皇太子となったが、20歳の350年頃に亡くなったと思われる。陵墓は佐紀陵山古墳に直交する位置にある墳長127mの佐紀高塚古墳を垂仁天皇が造営した。
そして垂仁天皇は自身の陵墓として、寿陵として佐紀に墳長267mの大古墳である五社神古墳を380年頃造営した。後に垂仁天皇は、古市に仲津山古墳を造営したのに伴い、五社神古墳が空陵となるので、そこに佐紀高塚古墳に埋葬されていた誉津別命の遺骸をこの古墳に移葬した。その際造出で祭祀が初めて行われた。

垂仁天皇は積極的で斬新的な人物であり、財力も豊かであった。そこで大決断を下す。それが河内の古市と百舌鳥への政権の中枢地の移動であり、その検討が350年頃から始まり数年後に移動を決断したものと推測される。記紀などでの垂仁天皇の評価は低いが、次々代の応神天皇と並ぶ大きな人物であったと推測される。当時の倭国は東アジアの一国として、外交に大きなウェイトを置いた国家であり、対外的な問題から特に半島や大陸との関係からも直接国家の中心地に水運の必要性を感じて、このまま国家の中心地がヤマトにあるより他地域に移動する必要性を感じていて、その適地が古市・百舌鳥に国家の中枢地を移することにより、この問題を解決することができると考えた。
その背景には、瀬戸内海航路が浪速から門司まで航海できる航路に開闢されたことにより、倭国の表玄関が浪速となったのである。また初期ヤマト政権の祖先の地はヤマトであり、引き続きヤマトも都の地とされヤマトへの物流も肝要であり、浪速から大和川を経由して容易にヤマトへアプローチ出来るようになった。河内への移動により、垂仁政権にとっての水運の問題が解決され、これにより大陸や朝鮮半島へのメイン航路が瀬戸内海航路となり、従来から抑えていた丹後（垂仁政権）は日本海航路が補完的な航路となり逆転した。これにより栄えていた丹後が衰えて行く。
更に政権の中枢を古市・百舌鳥に移すことにより、浪速からの瀬戸内海航路に直接関与することが可能となり、交易を抑えて倭国の物流網の殆どを握ることが出来た。そして日本海航路は主に新羅と、瀬戸内海航路は主に百濟との交易に利用された。
その証拠品が372年の百済から齎された七支刀である。これにより百濟との蜜月関係に入ってゆく。七支刀には銘文が記入されているが文面は不明である。
記紀では、後皇后の日葉酢媛命との子である五十瓊敷入彦命（いにしきいりひこのみこ）が「千口の太刀を作り、石上神宮に納めた」という。その後これらの刀剣の管理を物部氏に委ねられた。物部氏は武力に長けた豪族で、石上神宮は物部氏の総氏神として崇められた。
石上神宮は天皇家の武器庫となって行く始まりであるのか。七支刀はここにある。

垂仁天皇の在位期間は、景行天皇が崩御した345年から380年の35年間と推測される。

ここで垂仁天皇が築造されたと思われる古墳について語ろう。
これらの垂仁天皇が造営した古墳は、ヤマト王権を始めた古墳王の応神天皇の先駆けである。
古市で最初に築かれた古墳が365年築造の津堂城山古墳である。被葬者は景行皇子で尾張色の強い五百城入皇子と推定される。墳長208m、くびれ部に造出を持ち、盾形の二重周濠と周堤を持つ、更に外側に馬蹄型の外堤を持つがそれを含めると400mを超える。大型古墳に拘らず陪塚をもたないのは大王稜でない証かもしれない。複数の堤と周濠が墳丘を囲む形状は以後の古市・百舌鳥古墳に受け継がれてゆく。佐紀陵山古墳の形態を踏襲していることは佐紀政権とつながりのある証であろう。
同時期に百舌鳥に墳長155mの乳岡古墳が造営された。これが古市と百舌鳥に交替で大王墳級の古墳が造営される端緒である。

次に築造されたのが佐紀に造営された370年頃の佐紀石塚山古墳である。
この古墳は佐紀陵山古墳に極端に隣接する位置に有り、佐紀陵山古墳と同じく大王の妃の陵墓と思われる。3基の陪塚がある。被葬者は五百城入彦皇子が入り婿した尾張家の建稲種命の姫の志理都紀斗売が推定されるが確証が少ない。
その後が佐紀の五社神古墳で、丘尾を切断して380年頃築造された。後円部４段築成、前方部は３段築成、陪塚は5基程度か。被葬者は当初垂仁天皇自身の陵墓として造営されたが、自身が古市に仲津山古墳が造営されたので、先に述べたが、愛息である誉津別命を移葬したものと思われる。
佐紀高塚古墳は中型古墳で355年頃に築造され、誉津別命を埋葬したが移葬され、一時空陵となったが、改陵され、奈良時代に称徳天皇が埋葬された。

そして垂仁天皇は自身の陵墓を古市に建設することになり、それが仲津山古墳である。
仲津山古墳は385年に築造された墳長290mの大古墳であり、古墳の巨大化の端緒である。陪塚は鍋塚の小規模な古墳が７基、三ツ塚古墳に八島塚古墳、中山塚古墳、助太山古墳がある。
仲津山古墳の向いに同時期に築造された墳長150mの古室山古墳がある。被葬者は垂仁皇子の五十瓊敷入彦が推定される。
垂仁天皇こそ初期ヤマト王権からヤマト王権に橋渡しをした極めて異才を放つ天皇であったと推測する。
垂仁天皇には妃も多く皇子や皇女も多数いたと想像できるが、景行皇子や皇女が振替られているかも知れない。

一方丹後地方でも大古墳が造営されている、網野銚子山古墳は、380年頃築造で日本海を見下ろす潟湖に面した墳長200mの大古墳で、佐紀陵山と相似形で陪塚を2基保有し、被葬者は垂仁皇后の日葉酢媛が想定される。また竹野川の河口にある潟湖に面した神明山古墳は390年頃築造で墳長200mの大古墳で、行灯山古墳と相似形であり、被葬者は日葉酢媛の弟の朝廷別王が想定される。

8.4.尾張氏血脈の継承

記紀では尾張氏の本貫地が葛城の高尾張邑であり、天皇家との関係も深く尾張氏は海部氏とも同族である。
そして海部氏と尾張氏が時代によって権力の移行が行われ、どちらかが権力を握る氏族でなかったのか。
尾張氏は、崇神天皇の治世の時代に、何らかの理由で本貫地を狗奴国が衰えて空地となっていた愛知県名古屋市に移った。一方海部氏は垂仁天皇の皇后に日葉酢媛を送り込み中央政権の進出も果たす。
両氏の系図を見ると同じ系図であり、それが縦系図として著された『海部氏本系図』である。
海部氏系図（あまべし）は、国宝である『本系図』と『勘注系図』から成る系図で、貞観年中（859年～877年）に成立し、丹後一宮「籠神社」の社家である海部氏の系図である。『勘注系図』は『本系図』を補うもので詳細に記録されている。この様に丹後の海部氏と尾張の尾張氏は同族であり、ゆくゆく各々丹波国造と尾張国造と造となった名族である。

この『勘注系図』を信じると7世孫の尾張大海媛が崇神妃となり、分家となったその子が八坂入彦となっている。

この八坂入彦も誰かに入り婿となったと思われるが記録がなく不明である。八坂入彦の子が9世孫の八坂入媛であって、入り婿になったのが崇神皇子の景行天皇である。（ヤマト王家の想定系譜を参照）尾張氏の13世孫の志理都紀斗売に入り婿したのが、その名の通り景行皇子の五百城入彦皇子である。確認出来ない部分もあるが、その子が品陀真若王であり、この王が同じ13世孫である妹の金田屋野姫命に入り婿した。
その子の仲津姫に応神天皇が入り婿して継承権を得た。同母の妹の高木入姫、弟姫も応神天皇の妃となった。
二人の陵墓が墳長168mの百舌鳥大塚山古墳であるが、今は破壊されて存在しない古墳である。

図５　古市・百舌鳥古墳群

8.5.古市・百舌鳥の古墳

『帝紀』によった記紀の陵墓記載では、5世紀前半から中葉の仁徳陵、履中稜、反正陵の３代の陵が百舌鳥にあると記載されているが、場所が明らかでない。その場所について『延喜式』の諸陵寮式では、仁徳陵が百舌鳥耳原中陵、履中稜が同南陵、反正陵が同北陵とされている。文献資料からでは、これを解くことができない。
これらの陵墓の造成時期については、古墳を囲むように立てられている円筒埴輪で判る。それは円筒埴輪編年が構築されたことによる。円筒埴輪編年によれば、上石津ミサンザイ古墳は第Ⅲ段階の円筒埴輪が、仁徳陵が第Ⅳ段階のものが、反正陵を土師ニサンザイ古墳と仮定すると第Ⅳ段階の終り頃の円筒埴輪である。これにより古墳の造営時期が履中稜が一番古く、次に仁徳陵そして土師ニサンザイ古墳の順となる。
更に陵墓の造営が古市の仲津山古墳に始まり、次に百舌鳥の上石津ミサンザイ古墳、次に古市の誉田御廟山古墳、次に百舌鳥の大仙陵、迄二つの古墳群の間を陵墓が交互に営まれている。
最も不自然な点が百舌鳥の陵墓で最も古い、上石津ミサンザイ古墳の被葬者の名前が文献史料からでは、見出せないことである。親の仁徳天皇の陵墓は大仙陵で間違いなく、子の履中天皇が上石津ミサンザイ古墳の被葬者ではあり得ないのであり、履中天皇の諱は『日本書紀』では去来穂別天皇（いざほわけのすめらみこと）であり、陵墓は墳長227mの古市の市の山古墳と思われ、当時の天皇陵としては小さすぎる。本稿では皇位に就いていない人物と推理する。
また反正天皇も相当する陵墓もなく実在しない人物と想定される。

品陀真若王が誉田天皇として継承したものと想定される。
仮に誉田天皇を除外してしまうと、百舌鳥で最初の大古墳である上石津ミサンザイ古墳の被葬者がいなくなってしまう。応神天皇の諱の一つに『古事記』に品陀和気命の名もあり、品陀真若王の事績を応神天皇の事績に重ねたのでないか、と本稿は推測する。つまり品陀真若王の事績を応神天皇の事績とされて誉田天皇の名は記紀に載らない天皇としたと推測される。誉田天皇は古市誉田地区の実力者であり、応神天皇を強く支えた天皇であったと推測する。垂仁天皇が崩御した380年に、既に継承権を有していた品陀真若王が誉田天皇として継承し、その次代の継承も誉田別尊（後の応神天皇）が既に仲津姫に入り婿して継承権を掌握していた実力者であり、ほぼ一体となって二人の天皇は行動したものと推測される。

これ迄見てきた通り、女性継承つまり入り婿する形で大王継承が成されてきたが、記紀では、男性継承を基本に考えているので仲哀天皇の皇子である麛坂皇子と忍熊皇子が継承権を奪われると危惧した両皇子が４世紀末に起こした反乱が述べられているが、架空の仲哀天皇の皇子であり、乱の時期も明確でなく記紀の間でも内容も異なり、作為の事件と考え且両皇子も実在したか疑問である。

仲津山古墳の次の天皇墳が、百舌鳥の400年頃築造の墳長365mの上石津ミサンザイ古墳であり、被葬者は誉田天皇である。応神妃の仲津姫は百舌鳥大塚山古墳に当初埋葬されたが、父の誉田天皇の意志により父と同じ上石津ミサンザイ古墳の前方部に追葬された。次いで古市の420年頃築造の墳長425mの誉田御廟山古墳であり、被葬者が応神天皇である。次いで百舌鳥の440年頃築造の仁徳天皇の墳長486mの大仙陵古墳である。ここにヤマト王権は絶頂期を迎えて、ここにヤマト王権が誕生したのである。

応神天皇を以って、以後のヤマト王権の天皇達は入り婿制度から脱皮することとなる。
力を所望する政治には力強い大王（天皇）が必要であり、継承権を持つ女性に力強い男性が入り婿する必要性があった。男子継承ではこれが叶わず、女性継承が最も合理的な継承となる。
そして応神天皇を以って、国も安定し内政から外征を実施する力を持てる国家が誕生したことにより、男子継承が可能となった。

応神天皇以後の継承について、
記紀の継承は、応神天皇－仁徳天皇－履中天皇－反正天皇－允恭天皇－安康天皇－雄略天皇－清寧天皇－顕宗天皇－仁賢天皇－継体天皇－安閑天皇－宣化天皇－欽明天皇とある。
本稿の古墳から見た継承は、

応神天皇[誉田御廟山古墳]－仁徳天皇[大仙陵古墳]－（宇治天皇）[市庭古墳]－允恭天皇[土師ニサンザイ古墳]－（木梨軽皇子）[峯ケ塚古墳]－（安康天皇）[古墳円墳]－雄略天皇[岡ミサンザイ古墳]－清寧天皇[野中ボケ山古墳]－飯豊天皇[北花内大塚古墳]－顕宗天皇[狐井城山古墳]－仁賢天皇[白髪山古墳]－継体天皇[今城塚古墳]－安閑天皇[高屋城山古墳]－宣化天皇[鳥屋ﾐｻﾝｻﾞｲ古墳]－欽明天皇[五条野丸山古墳]、 欽明天皇を以って大和朝廷が確立したと言える。
（ ）は極短期間を継承した天皇である。

ここの経過などについては、機会があれば述べたいと思うが、今回は応神朝の成立前までとして筆を置く。

【参考文献】敬称略

伊都国女王と卑弥呼	糸島市教育委員会
王権の地・桜井	桜井市埋蔵文化センター
纒向発見と邪馬台国の全貌	角川文化振興財団
古代国家はいつ成立したか	都出比呂志
古墳とその時代	白石太一郎
古墳とヤマト政権	白石太一郎
倭国の形成と展開	白石太一郎
古墳の被葬者を推理する	白石太一郎
天皇陵古墳を歩く	今尾文昭
天皇陵古墳への招待	森浩一
天皇陵の謎	矢澤高太郎
ヤマト王権	吉村武彦
前方後円墳の世界	広瀬和雄